様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１４２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０４２４

研究課題名（和文）日英心理動詞構文の使役の意味に関する照応およびアスペクト的現象の研究

研究課題名（英文）Zibun-binding, aspect-shift, and causative meaning in Japanese psych-verb constructions

研究代表者
板東　美智子（BANDO, Michiko）

滋賀大学・教育学部・教授

研究者番号：４０３０４０４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、主に日本語の心理動詞構文の主語位置に現れる照応詞「自分」の解釈の問題を語彙意味論の枠組みで扱った。心理動詞構文の主語に再帰代名詞や「自分」が現れると後方照応が可能になる場合があり生成文法束縛理論の例外として1970年代から統語理論や機能文法の枠組みで分析がなされてきた。本研究では、これまでの分析案で扱いにくい出来事名詞句内の「自分」の話者視点と後方照応の相反する現象を示し、心理動詞の語彙意味構造と「自分」を含む名詞句内部の意味構造を生成語彙意味論の枠組みで形式化して、それぞれの構造の組み合わせの違いによって先行詞が話者になる場合と後方の名詞句になる場合のメカニズムを統一的に提案した。

研究成果の概要（英文）：This project mainly dealt with the problem of Japanese reflexive pronoun zibun, ‘self,’ which appears in the subject positions in Japanese psych-verb constructions. The problem is that zibun can have its antecedent in what follows, which is known as a backward binding phenomenon and an obstacle for the binding theory of Generative Grammar. It has been analyzed syntactically or functionally since the 1970s. In addition to the above problem, this study showed new data, in which zibun in an event nominal can be interpreted either as the speaker or as the cataphoric noun in the sentence, which neither syntax or functional analysis alone has been able to explain clearly. Instead, we formalized the lexical semantic structures of the zibun phrases and those of psych-verbs, and then combined them to be a constituent, based on causation. With the results of the different combinations, we could explain the data of irregular zibun interpretations in a uniform way.

研究分野：言語学

キーワード：心理動詞　自分　使役　後方照応　話者視点　出来事名詞　クオリア構造　統語的複合語

１．研究開始当初の背景

(1) 心理動詞がその主語位置に再帰代名詞を持つと、目的語がその先行詞になることができるという現象 (a) は、生成文法理論において、先行詞がその再帰代名詞を c 統御していないため、束縛原理の Principle A に従わない例外的現象になっている。

a. A picture of herself$_i$ pleased Ruth$_i$ so much. （心理動詞）

b. *A picture of herself$_i$ hit Ruth$_i$ on the head. （物理的活動動詞）

このような後方照応の現象を例外のままにしておくのではなく、どのような構文においても再帰代名詞は束縛原理に従っているという仮説のもと様々な分析が提唱されてきた。代表的な研究として、Belletti and Rizzi (1988) の統語的分析や、Jacekndoff (1992) の意味的分析などがある。日本語の「自分」の後方照応を扱った研究には、統語的分析に、McCawley (1976), Fujita (1993)、機能的分析に久野 (1978)、Sells (1987)、三原・平岩 (2006)、視点を統語的分析に組み入れた Nishigauchi (2005, 2009) がある。しかし、統語的分析や機能的分析で説明できない例もある。

c. 自分$_i$の噂が花子$_i$を驚かせた。

d. 自分$_{*i/j}$意見が花子$_i$を驚かせた。

同じ心理動詞でも「自分」が現れる主語の意味的な特徴によって後方照応の可/不可が生じることから、板東 (2011) で、Pustejovsky (1995) の名詞句が「出来事」と強制意味解釈されるという指摘を、意味構造（クオリア構造）を用いて精緻化し、その強制意味解釈のメカニズムを解明しようと試みた。

(2) 活動動詞が心理動詞化するアスペクトシフトについては、英語では Jackendoff (1990, 2007)、Iwata (1998) による *hit* の心理動詞用法の観察と分析がある。日本語では小野 (2005) が「机を動かす」から「心を動かす」へのメタファーを Pustejovsky (1995) が提唱する意味の生成プロセスで説明している。筆者は以上の先行研究を踏まえて、板東 (2009, 2010) で、(e) のような活動動詞の心理動詞化は、主語の出来事的強制解釈と、主語と目的語名詞句の意味構造の構成の過程で使役 (CAUSE) の意味が生じることによると述べた。

e. His words hit him.

しかし、主語の出来事的強制解釈の記述や目的語名詞句の意味構造を更に客観的に、かつ、一般的規則性を持たせる必要があり、更なる観察と考察を続けていく予定である。

(3) 心理動詞と関連する使役構文の動詞句の特徴にも言及する。英語では使役動詞の *have* について Belvin (1993), Ritter & Rosen (1993, 1997) 等が、日本語では使役形態素の *-(s)ase* について久野・高見(2007)が、使役と共起する動詞句は非対格自動詞をとることができるかどうかについて議論している。筆者は、上記の (c) のような例から、*-(s)ase* との共起の可否は非対格自動詞といった品詞分類ではなく、Igarashi & Gunji (1998), Nakagawa (1998) で注目された「出来事の開始時点」が関係すると考えている。(c) のような主語名詞句の意味構造と、板東 (2011) で発表した二種類の *-(s)ase* の意味構造との組み合わせに「出来事の開始時点」という概念を取り込んで説明を試みようとしているところである。

２．研究の目的

本研究では、日英心理動詞構文の様々な特徴の中から、主に、照応詞が後方の名詞句に束縛される後方照応の現象と、活動動詞の心理動詞化（活動から感情の状態変化というアスペクトシフト）の現象にまつわる問題を扱う。どちらの現象も使役の意味と、その使役主の名詞句の意味と動詞句の意味が構成されることが関係している。この構成性の原理に基づいた解釈のプロセスを形式化し、一見、関連性のない現象が「使役」をキーワードに統一的に捉えられることを示す。

３．研究の方法

(1) 2012 (H24) 年度：日英心理動詞の後方照応の資料収集と、照応に関する先行研究の調査、日本語の心理動詞構文の出来事主語にある「自分」の後方照応の分析。Pustejovsky (1995) のクオリア構造を用いて心理動詞、*–(s)ase*、主語名詞句を形式化し、それぞれを構成することによって分析を試みた。

(2) 2013 (H25) 年度：日本語の使役動詞構文に関する先行研究の調査から、例外的に非対格自動詞（典型的には心理状態変化動詞）につく *–(s)ase* 形があることを観察し、その要因「出来事開始時点の可視性」を指摘した。

(3) 2014 (H26) 年度：上記、(1) について学会発表とプロシーディングスに論文投稿、(2) について言語学研究書に論文発表を行った。同時に、(2) の非対格心理自動詞と使役構文の研究の過程で派生した統語的複合語 V-*kake* の興味深い振る舞いについて観察を始めた。

(4) 2015 (H27) 年度：統語的複合語 V1-V2 のなかで、瞬間動詞や心理変化非対格自動詞の V1 に出来事開始を示すアスペクト補助動詞 *–kake* が接辞したとき、V1 の出来事が未然の場合 *–kake* が法助動詞として機能変化する状況を指摘し、そのシフトのメカニズムを分析した。考察結果は紀要に論文を投稿したほか、学会発表を二件、行った。

４．研究成果

(1) 2012 年の論文は、日本語心理動詞の使役構文にみられる再帰代名詞の後方照応の現象を扱った。再帰代名詞「自分」の振る舞いは、統語的束縛原理以外にも、構文によって談話的分析や意味的分析に従うことを前提とし、その中でも「自分」の後方照応の現象は構成要素の名詞句と心理使役動詞の意味構造を記述し構成していくことで「自分」の先行詞が決定されることを主張した。特に、「自分」を含む主語名詞句が「出来事」解釈を持つとき、心理使役動詞 V-(s)ase は一つの因果関係を持つために、目的語の「経験者」が主語の「出来事」に対してなんらかの関わりをもっていく。そこで「経験者」は「自分」の先行詞として解釈されるのであるが、その過程を形式的に記述することで、統語的には例外的な振る舞いをする「自分」」が意味的には規則的にその先行詞が決まっていることを示した。

(2) The paper in 2015 has covered four main points: There are two types of Japanese Eventive Nominals (EN). Thus, *zibun-no* ENs can also be divided into two types: (i) Agentive *zibun* which resides in SpecENP, and (ii) non-agentive *zibun* which resides in CompENP. There are also two types of Japanese psych-causative verb constructions: (iii) One is direct causation whose causer subject has ACT-ON head, while (iv) the other is indirect causation whose causer subject has PERCEIVE head. Assuming the above two types of ENs and two types causative structures, *zibun* in *zibun-no uwasa-ga Hanako-o odorok-ase-ta*, which shows irregular backward binding, meets the c-command requirement in the combination between *zibun* and indirect causative verb *odorok-ase*. Assuming the ModP projection above IP, *zibun* in *zibun-no iken-ga Hanako-o odorok-ase-ta*, whose antecedent is understood as the speaker, also meets the c-command requirement via *pro* in the modality phrase.

(3) 2014 年の論文では、日本語の使役構文の中でも、とりわけ、心理動詞の非対格自動詞が V-*(s)ase* 形の使役構文に用いられる例、あるいは、「監督読み」と呼ばれる非対格自動詞の使役構文の例の分析を行った。一見例外的な使役構文をもとに、-*(s)ase* 補文の動詞句が表す出来事の開始時点の可視性 (visibility) が V と –*(s)ase* の接辞化の可否を左右するということを示し、素性構造を用いてそのメカニズムを形式化した。

(4) 上記 (3) の論文執筆の過程で、出来事の開始時点をあぶり出すために用いた言語テスト V-*kake* 構文の結果がはっきりと出なかったことが、予期していなかった統語的複合語 V-*kake* の関心と研究へと繋がった。2015 年紀要に投稿した論文では、統語的複合語の V-*kake* と語彙的複合語の V-*kake* の振る舞いの違いを観察し、それぞれの意味的特徴と統語構造を提案した。

(5) 2015 年度には統語的複合語 V-*kake* 構文の研究が発展し、V-*kake* がもつ多義性（将現態と始動態）の要因を特定し、意味構造を用いて記述した。次に、2016 年は、その多義性はアスペクト補助動詞から法助動詞への機能シフトであるという仮説を出し、瞬間動詞や非対格心理自動詞と –*kake* を接辞させてその仮説を支持する現象を学会で発表した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① Michiko Bando, “Zibun-no eventive nominal and its binding phenomena in Japanese psych-causative verb constructions,” *MITWPL WAFL* 10, 発表時査読有, 印刷中, 12 pages.

② 板東美智子・日高俊夫, 「統語的アスペクト補助動詞「-かけ」の意味機能」『言語処理学会第 21 回年次大会発表論文集』, 査読無, 2015, pp. 389-392.

③ BANDO Michiko and HIDAKA Toshio, “On Syntax and Construal of V-*kake* Constructions,” *TALKS* 18, 編集者の査読有, 2015, pp. 1-12.

④ 板東美智子「非対格自動詞の V-(s)ase 使役他動詞化の可否と出来事開始時点の可視性」『複雑述語研究の現在』, 査読有, 2014, pp. 125-149.

⑤ 板東美智子「日本語の心理使役構文と後方照応の「自分」について」*KLS* 32, 査読有, 2012, pp. 218-229.

〔学会発表〕（計 5 件）

① 板東美智子・日高俊夫「統語的複合語「V-かける」の二義性について」関西言語学会第 41 回大会, 於：龍谷大学, 2016.

② 板東美智子・日高俊夫「統語的アスペクト補助動詞が主観性を帯びるとき」言語処理学会第 22 回大会, 於：東北大学, 2016.

③ Michiko Bando, “Zibun-no eventive nominal and its binding phenomena in Japanese psych-causative verb constructions,”Workshop on Altaic Formal Linguistics 10 (WAFL 10), at MIT, 査読有, 2014.

④ 板東美智子「動詞意味論と英文法指導のかけはしを目指して」第27回英語教育学会 KELES セミナー講演, 於: 同志社大学, 2012.

⑤ 板東美智子「非対格自動詞の V-(s)ase 使役他動詞化の可否と出来事開始時点の可視性」国際シンポジウム『日本語の自他と項交替』, ポスター発表, 於: 国立国語研究所, 査読有, 2012.

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
板東美智子（BANDO Michiko）
滋賀大学・教育学部・教授
研究者番号：40304042

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：